

BSH（基本件名標目表）とNDLSH（国立国会図書館件名標目表）の計量的比較分析

村上 幸二

奈良学園登美ヶ丘ライブラリー

A Quantitative Analysis of BSH (Basic Subject Headings) and NDLSH (National Diet Library List of Subject Headings)

Koji Murakami

Naragakuen Tomigaoka Library

概要

件名標目は図書館資料の主題検索に大きく貢献するが、現在、我が国には2つの代表的な件名標目表が存在している。1つはBSH（基本件名標目表）で、もう1つはNDLSH（国立国会図書館件名標目表）である。前者はTRC MARCをはじめとする民間MARCに採用され、後者はJAPAN/MARCに採用されている。BSHは多くの図書館が利用している標準件名標目表であり、第4版の標目数は7,847件で、主に一般的な用語を収録している。NDLSHは国立国会図書館が利用する一館件名標目表であるが、2005年度版の標目数は16,879件で、主に学術的な用語を収録している。この両者をNDC（日本十進分類法）のカテゴリごとに計量的に分析した結果、まず量的な構造における類似度が高いものであることが明らかとなった。次にベクトル空間モデルを使って両者の類似度を調べた結果、語彙の表現についての類似度は高くはないが、扱う分野の類似度については、かなり高いものであることが明らかとなった。

1. はじめに

図書館における主題アクセスツールの1つである件名標目は、いわゆる統制語彙から主題検索を行うことができるものとしてその有用性をあげることができ、これまでも件名標目を用いた主題検索システムの研究が行われてきた¹⁾。いまやほとんどの図書館OPACで件名検索のインターフェースが用意されているが、件名による主題検索が成功するためには、それぞれの書誌データに適切な件名標目が付与されていることが条件となる。

ところで現在、我が国には2つの代表的な件名標目表が存在している。1つは日本図書館協会が維持管理する基本件名標目表（Basic Subject Headings、以下、BSH）²⁾で、もう1つは国立国会図書館から提供されている国立国会図書館件名標目表（National Diet Library List of Subject Headings、以下、NDLSH）³⁾であ

る。BSHは多くの図書館が利用する標準件名標目表であり、NDLSHは国立国会図書館が利用する一館件名標目表であるが、『日本全国書誌』に採用され、JAPAN/MARCにも用いられている。この他にも、小学校の件名標目表⁴⁾、中学校・高校の件名標目表⁵⁾があるが、特にBSH、NDLSHといった2つの主要な件名標目表の存在は、図書館の目録作成や資料検索に大きな影響を与えている。例えば、NACSIS-CAT⁶⁾の和図書書誌レコードの件名には、BSHとNDLSHの混在が見られる。同システムは、TRC MARC等の民間MARCを含む参照MARCとの関係もあって、両者の付与状況は刊行年により異なるが、BSHのみ付与されたものや、NDLSHのみ付与されたもの、あるいは両方付与されているもの等、様々である⁷⁾。我が国の大学図書館のほとんどが、書誌ユーティリティとしての機能を持つNACSIS-CATを利用してコピー・カタログングを行っている状況に鑑みると、それぞれのOPACにおいても同様の問題を抱えているものと思われる。

これまで改訂を重ねてきたBSHとNDLSHは、現在シソーラス・スタイルを採用し、相互の件名標目を参考にしながら参照語を増やしており、両者の距離は縮まっていることが伺える⁸⁾。一方、多くの図書館でこれまで蓄積されてきた膨大な書誌データの存在を考えると、1件ずつ件名の置き換え作業を行うよりも、検索システム側で両者の特徴を生かした何らかの仕掛けが必要となろう。このようなことから、筆者はこれまでBSHとNDLSHを対象にした主題検索システムの開発を行ってきた⁹⁾。具体的には、NDC（日本十進分類法）のカテゴリを中心に両者を統合して検索する手法を実装した。当システムにとっては、NDCカテゴリを用いることによってBSHとNDLSHがどれだけ連携できるか、という点も重要な要件の1つであることから、NDCをもとに両者の類似度が高くなるほど望ましいといえる。本研究では、この条件のもとでBSHとNDLSHの類似度がどの程度なのかを数値的に明らかにすることを目的として、比較分析を行った。

2. 先行研究および本研究の方法

BSHとNDLSHは、標準件名標目表と一館件名標目表といった違いを含め、論理構造上の相違が少なからず存在することが、これまでの研究によって明らかにされている¹⁰⁾。計量的な面では、BSHとNDCの相関索引に対して、量的な構造を分析してその類似点や相違点等を明らかにする研究が行われている^{11) 12)}。本研究では、BSHとNDLSHの比較分析という課題に対し、このような計量的な分析手法を取り入れ、量的な構造や、収録されている名辞および分野などについてどの程度類似しているのか、また相違があるのかを、NDC类目ごとに確認する。ここで分析の実作業には、BSH4-CF（BSH第4版 Computer File）、およびNDLSH2005年度版テキストデータを用い、データの整形や計量的な比較分析にはPerlによるスクリプトを自作した。なお、本稿において特に断りなくBSH、NDLSHと記すときは、前者はBSH第4版、後者はNDLSH2005年度版を指す¹³⁾。

3. BSHおよびNDLSHの概要

BSHの収録数は、標目数7,847件、参照語2,873件、説明付き参照93件、細目169件である。また、国名標目は189件、同参照語は21件である。これらを合計すると11,192件になる。一方NDLSHは、主標目、細目、細目付き件名標目数の総計が16,879件で、50音順見出し数（標目および参照語の総計）では36,922件である。本研究では、NDCをもとに分析するため、まずNDCが付与されているものと、付与されていないものとを区別して集計した（表1）。その結果、BSHではNDCの付与がなされているものが8,038件、付与されていないものが3,154件であり、NDLSHではNDCが付与されているものが14,682件、付与されていないものが22,240件であった。

表1 BSHとNDLSHの量的構造

種別	BSH	NDLSH
NDC付与あり	8,038件 (71.82%)	14,682件 (39.76%)
NDC付与なし	3,154件 (28.18%)	22,240件 (60.24%)
合計	11,192件	36,922件

表1から分かるように、BSHではNDCの付与率が全体の71.82%と比較的高いのに対し、NDLSHではNDC付与の割合が低く全体の39.76%であった。表1をグラフ化したものを次に示す（図1、図2）。

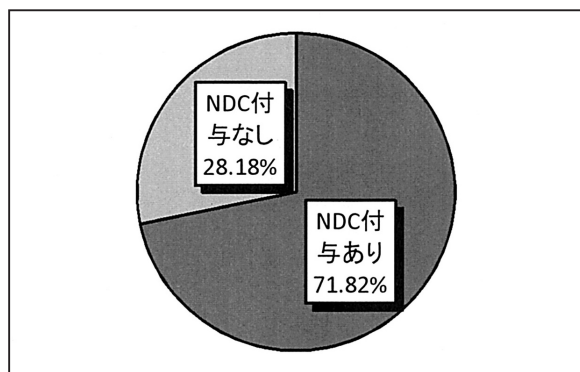


図1 BSHにおけるNDC付与率

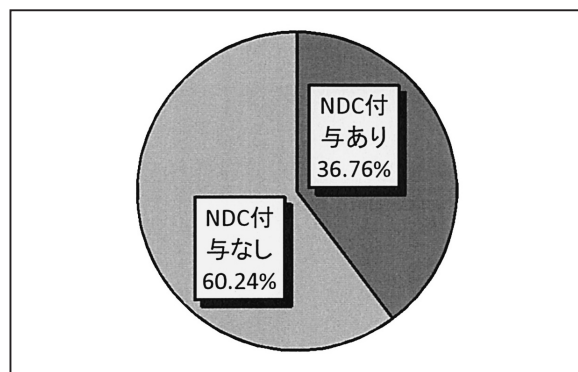


図2 NDLSHにおけるNDC付与率

4. NDCの類目による外面的形式からみた分析

NDCの類目による分析を行うにあたり、まずNDCの構造について簡単に触れておく。NDCは知識の総体を9つに分け1から9までの記号をあてて、0を総記としている。そして、第1次区分（類目）から、第2次区分（綱目）、第3次区分（要目）といったように細分化していく。本研究では、主にNDCの類目ごとにBSHとNDLSHについて比較分析を行うため、まずNDCの類目について示す（図3）。なお、本稿で使用するNDCは新訂9版であり、とくに断りなくNDCと表記するときは同版を指す。

NDC第1次区分（類目）

- 0 総記（図書館、図書、百科事典、一般論文集、逐次刊行物、団体、ジャーナリズム、叢書）
- 1 哲学（哲学、心理学、倫理学、宗教）
- 2 歴史（歴史、伝記、地理）
- 3 社会科学（政治、法律、経済、統計、社会、教育、風俗習慣、国防）
- 4 自然科学（数学、理学、医学）
- 5 技術（工学、工業、家政学）
- 6 産業（農林水産業、商業、運輸、通信）
- 7 芸術（美術、音楽、演劇、スポーツ、諸芸、娯楽）
- 8 言語
- 9 文学

図3 NDC類目（出典：もり・きよし原編『日本十進分類法 新訂9版』1995. 本表編より）

先述したように、NDCが付与されているものを対象にした場合、BSHは8,038件、NDLSHは14,682件となるが、これらは語彙をもとにカウントしたものである。しかし例えばBSHにおいて、「写真機」という件名に「535.85」と「742.5」の2つのNDCが与えられていることに着目すると、5類と7類でそれぞれカウントする必要があり、この場合は2件となる。このように語彙をもとにカウントする場合とNDCをもとにカウントする場合を区別して表にまとめると、次のようになる（表2）。

表2 語彙をもとにカウントする場合とNDCをもとにカウントする場合の比較

種別	BSH	NDLSH
語彙をもとにカウント	8,038件	14,682件
NDCをもとにカウント	10,797件	19,853件

表2より、NDCをもとにカウントした場合、BSHにおいては語彙をもとにカウントする場合の約1.34倍、NDLSHにおいては約1.35倍と、全体の量からみた場合に両者ともほぼ同じ割合で複数のNDCが付与されていることがわかった。本研究ではNDCの類目ごとに分析するため、NDCをもとにカウントする方法をとる。当前提のもとで、BSHとNDLSHについてNDCの0類から9類ごとに量的な構造を示すと表3のようになる。その量的構造の比較をグラフ化したものが図4である。

表3 NDC類目ごとの量的な比較

NDC(類目)	BSH		NDLSH	
0	268	2.5%	470	2.4%
1	567	5.3%	1043	5.3%
2	687	6.4%	1547	7.8%
3	2335	21.6%	4900	24.7%
4	2323	21.5%	5668	28.5%
5	2029	18.8%	2482	12.5%
6	1061	9.8%	1989	10.0%
7	951	8.8%	631	3.2%
8	263	2.4%	656	3.3%
9	313	2.9%	467	2.4%
合計	10797		19853	

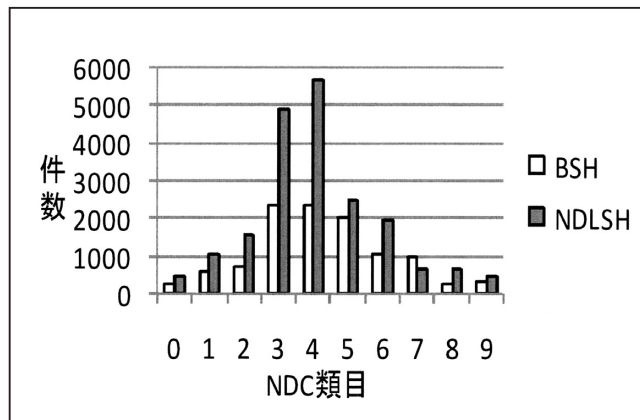


図4 NDC类目ごとの量的構造グラフ

これらの結果、BSHでは3類（社会科学）をトップに、4類（自然科学）、5類（技術・工学・工業）が非常に多く、これらで全体の約62%を占めていることが分かった。NDLSHでは4類（自然科学）が最も多く、次いで3類（社会科学）、5類（技術・工学・工業）と続き、これらで全体の約66%を占めている。図4のグラフを見れば明らかなように、BSHもNDLSHも両端が低く、中心部が高い形をしている。実際、0類（総記）、1類（哲学）、2類（歴史）の3つ、および7類（芸術）、8類（言語）、9類（文学）の3つについては、各々全体に占める割合は1ケタ台のパーセントである。内容的にBSHの方は一般的な用語を収録し、NDLSHの方は学術的な用語を収録しているという違いがあるものの、収録分野ごとの量的な構造は両者とも類似しているものと判断できる。

ところでBSHとNDLSHは、それぞれ収録している語彙数に差があるため、ここで0類から9類にわたる両者の語彙の量的な変化について、どの程度の相関関係があるかを調べてみた。それは、図4で示したNDC类目ごとの量的構造において、0類から3類や4類にかけて増加し、そこから9類にかけて減少していくという構造がBSHとNDLSHとでかなり似ていると思われたからである。それらの相関関係を調べるにあたって、BSHとNDLSHの量的変化の散布図を示す（図5）。

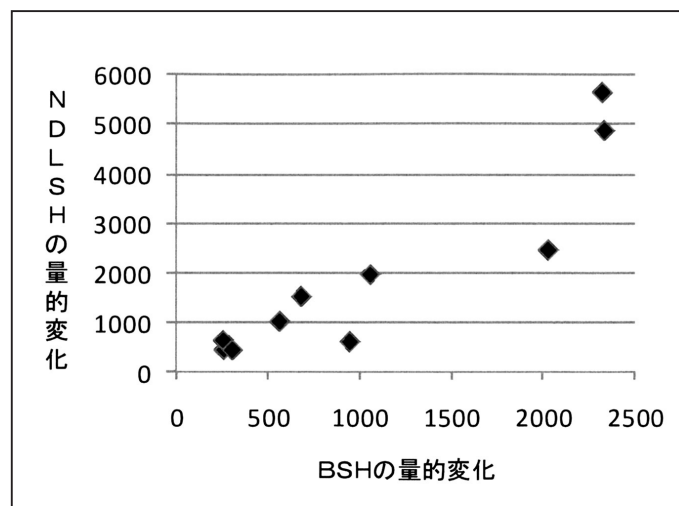


図5 BSHとNDLSHの量的変化の相関関係

図5より、右上がりの強い正の相関関係があることがわかる。ここで両者の相関係数を求めると、実に $\gamma_{xy}=0.91772463$ となった。これによりBSHとNDLSHの分野別件数の割合は、相当程度類似していることが明らかとなった。

5. NDCの類目による内面的形式からみた分析

前節までは、BSHとNDLSHの外面的形式における分析であったが、本節では内容的側面に視点を移し、件名標目表に収録されているそれぞれの名辞や、付与されているNDCの相違に着目して分析を行う。ただし、ここでは同義語等について人的に判断するのではなく、一致するかどうかの比較分析は「形」そのものを機械的に判断する方法で行った。ここで、両者が用いる名辞の表記のズレが計算結果に大きく影響するため、次のような加工を行った。

●BSHまたはNDLSHの表記を加工した点

- 1) BSHの年代の形式をNDLSH形式に変更（例：1950-60 → 1950~1960）
- 2) NDLSHの主標目と細目をつなぐ“--”をBSH形式の“—”（ダッシュ）に変更
- 3) NDLSHに含まれるLCSHを削除。ただし、一般的に日本で通用しているアルファベットの名辞はそのまま残した。その見分けはすべてアルファベット大文字のものとした。なお、dB（デシベル）という件名は単位によく使用されるものと判断して残した。
- 4) NDLSHにおいて、※、《 》、[]等の記号を削除
- 5) NDLSHにおいて、「地理区分」、「主題区分」の指示を削除

5. 1. BSHとNDLSHの語彙における類似度分析

BSHとNDLSHに収録されているそれぞれの件名標目は、語彙の形がどの程度類似しているのであろうか。これを調べるにあたって、情報検索の世界で定評のあるベクトル空間モデルを用いて実験を行った。数値は余弦で算出し、式は次のように定義した。

$$sim(b, n) = \frac{\sum_{j=1}^l W_{bj}W_{nj}}{\sqrt{\sum_{j=1}^l W_{bj}^2} \sqrt{\sum_{j=1}^l W_{nj}^2}} \text{-----} (1)$$

この(1)式において、 b はBSHの重みベクトル、 n はNDLSHの重みベクトルを表す。分子は内積を表している。NDCの類目ごとにBSHとNDLSHの語彙の類似度をまとめたものを表4と図6に示す。

表4 BSHとNDLSHの語彙の類似度

NDC (類目)	BSH	NDLSH	内積	類似度
0	268	470	141	0.397285566
1	567	1043	365	0.474634367
2	687	1547	409	0.396734330
3	2335	4900	1596	0.471836360
4	2323	5668	1394	0.384169823
5	2029	2482	933	0.415757155
6	1061	1989	559	0.384801472
7	951	631	282	0.364035863
8	263	656	146	0.351498165
9	313	467	134	0.350488836

表4における内積は、BSHもNDLSHも同じ語彙は1回しか現れないことから、実際には一致した語彙数と同様になる。

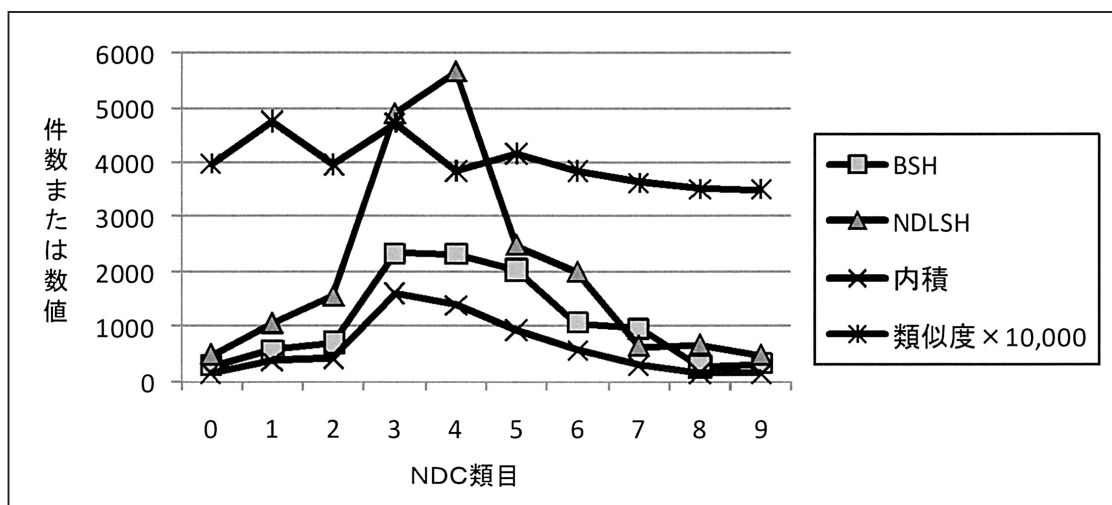


図6 NDC (類目) ごとの類似度：語彙

図6から判断すれば、3類と4類のあたりでBSHとNDLSHの件数が高くなっていると共に、内積の数値も高くなっていることが分かる。ところで類似度はどうであろうか。ここで類似度を視覚的にわかりやすくするために、10,000倍した数値を曲線で示した。これを見ると、語彙の類似度はそれぞれの件数が表す曲線と異なる軌跡を描いているのがわかる。1類と3類でやや上昇が見られ、あとはほぼ一定といってよい。実際、標準偏差を求めると $s=0.041914$ であった。ちなみにBSHとNDLSHの数、そして類似度を合わせた3つの変数において、これらの関係を調べるために重回帰分析を行ったが、求めた回帰直線の決定係数は $R^2=0.16$ となり、それぞれの変量間の相関は見られなかった。

5. 2. BSHとNDLSHにおけるNDC分類番号の類似度分析

既述した語彙の類似度の場合と同様の方法で、NDC分類番号の類似度分析を行った。それぞれ付与されているNDCには複数の同じ番号が存在するため、それらの頻度を「重み」として計算すると、それらが内積に反映される。その結果をまとめたものを表5と図7に示す。

表5 BSHとNDLSHのNDC分類番号の類似度

NDC (类目)	BSH	NDLSH	内積	類似度
0	268	470	960	0.574973187
1	567	1043	2268	0.799630676
2	687	1547	3188	0.731909825
3	2335	4900	14652	0.802846254
4	2323	5668	16164	0.799163672
5	2029	2482	6018	0.693108137
6	1061	1989	4822	0.804789068
7	951	631	1711	0.700519711
8	263	656	1156	0.562667732
9	313	467	928	0.639859566

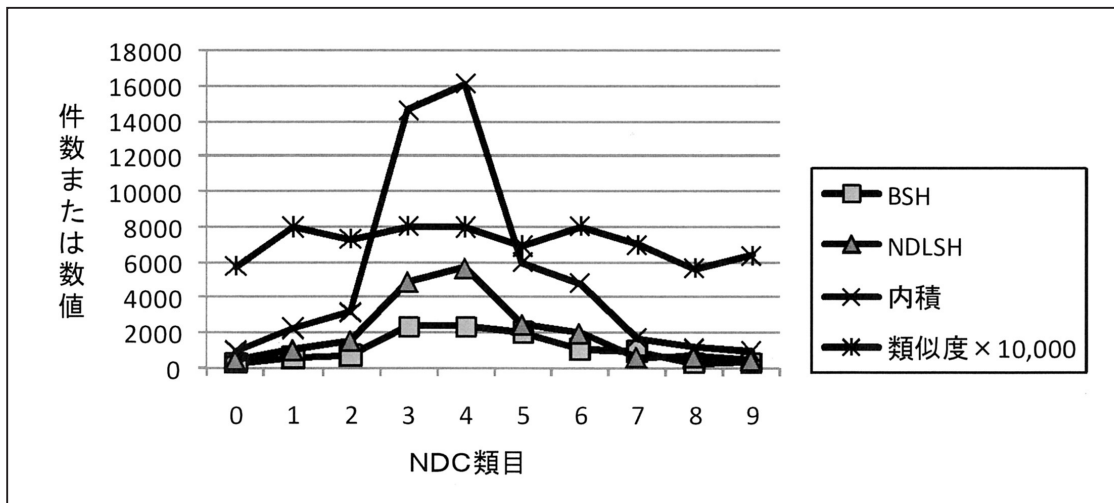


図7 NDC (类目) ごとの類似度：NDC分類番号

図7から明らかなように、BSHやNDLSHの件数および両者の内積では、山なりの軌跡を描いているにも関わらず類似度はほぼ直線的であり、いずれも高い数値となっている。標準偏差で表すと、 $s=0.089047$ であり、語彙で分析した場合程ではないが、ほとんどバラツキは見られないといってよいだろう。ここでも念のため、BSHとNDLSHの数、および類似度の3つの変量間で関係が見られるかどうかを調べるために重回帰分析を行ったが、回帰直線の決定係数は $R^2=0.42$ となり、語彙で分析した場合よりは高い数値を示したものの、ともに決定係数 R^2 が0.9以下であることには変わりなく、各変量間における関係は伺えなかった。

5. 3. 語彙の類似度とNDC分類番号の類似度の相関関係

これまでの結果から、「語彙」の側面および「NDC分類番号」の側面での類似度が明らかとなった。扱う内容が同じ（つまり同じ分類番号）であれば、使用する語彙も自ずと似てくることが予想されるが、そのことを数値的にどの程度近いかを次に見てみよう。NDC类目ごとに算出したそれぞれの類似度の相関関係を表す散布図は、次のようになる（図8）。

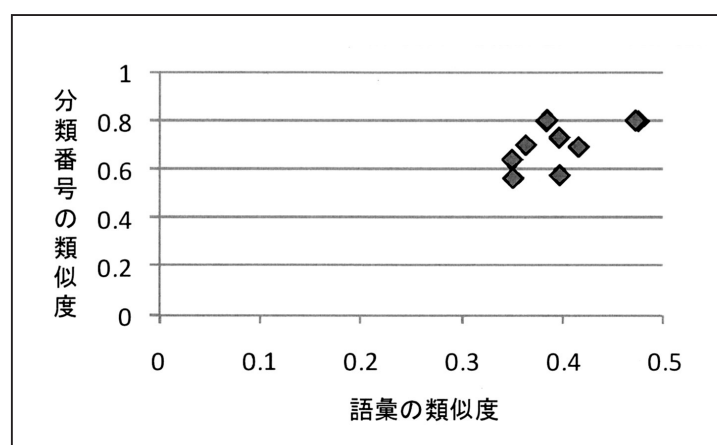


図8 語彙と分類番号の類似度の相関関係

図8を見るとかろうじて正の相関関係となっているといえるが、相関係数を求めると、 $\gamma_{xy} = 0.576114$ であった。この数値から判断すると、決して相関が強いとは言えない。つまり両者とも同じ分野を扱う件名であっても、それぞれ収録している語彙は近いとは言えない。ここに、BSHが一般的な用語を収録し、NDLSHが学術的な専門用語を収録しているという特徴の差が表れたと考えることができるだろう。

6. 細目の比較分析

ここまでは、それぞれの件名標目について比較分析を行ってきた。ところで、図書館において実際に目録を作成する際、「主標目—細目」といったように、件名標目の付与に細目を伴うことがある。本節では、この細目に関して比較分析を試みる。まず、BSHとNDLSHの細目の概要について簡単に触れておく。

●BSHにおける細目

BSHにおける細目は、次のとおり大きく7種類ある。

- 1) 一般細目…各件名標目のもとで共通して使用する。
- 2) 分野ごとの共通細目…特定分野のもとで必要に応じて共通に使用する。
- 3) 言語細目…各言語名のもとで必要に応じて共通に使用する。

- 4) 地名のもとの主題細目…地名を優先させ、そのもとに主題を細目として使用する。
- 5) 地名細目…上記に指定されている以外で、主題のもとに地名を細目として使用する。
- 6) 時代細目…時代を表す標目および「一歴史」の細目をを用いる標目の後に使用する。
- 7) 特殊細目…共通細目ではなく、すべて各標目のもとに示されている。

●NDLSHにおける細目

NDLSHにおける細目は、次のとおり大きく6種類ある。

- 1) 地名細目…「地理区分」の指示により地域を特定するために使用する。
- 2) 地名のもとの細目…地名の件名標目に細目を結合し、地域の主題を特定化する。
- 3) 時代細目…基本的に「歴史」の細目の後に使用。「時代区分」と呼ぶ。
- 4) 主題細目…「主題区分」の指示により、主標目の表す内容を詳細化するために使用する。
- 5) 形式細目…資料の出版形式、叙述形式を表すために使用する。
- 6) 特殊細目…特定の件名標目のもとでのみ使用される。

これらの細目を種類別に整理して一覧化したものを次に示す（表6）。

表6 BSHとNDLSHの細目に関する種類別一覧表

種 類	BSH	NDLSH
一般的・形式的なもの	一般細目	形式細目
主題に関するもの	——	主題細目
特定分野に関するもの	分野ごとの共通細目	——
言語に関するもの	言語細目	——
地名を先頭にするもの	地名のもとの主題細目	地名のもとの細目
地名に関するもの	地名細目	地名細目
時代に関するもの	時代細目	時代細目
特殊なもの	特殊細目	特殊細目

表6より、主題に関するものとして該当する種類がBSHにないが、NDLSHには「主題細目」として存在していることがわかる。また特定分野に関するものが、BSHには「分野ごとの共通細目」として存在する一方で、NDLSHにはない。さらに、言語に関するものがBSHには「言語細目」として存在する一方で、NDLSHにはない。ただし、これらはあくまでも両件名における細目の種類の呼称であって、それぞれ中身は異なる種類の細目に合致するものが存在する。したがって、BSHとNDLSHのそれぞれの細目における類似度を、まず種類の「枠」に関係なく全体的に分析してから種類ごとに分析する。当前提のもと、BSHとNDLSHの細目全体において一致した数を求めると、112件となった。

次に、前出の（1）式により、細目全体および細目の種類ごとに類似度を計算した結果を示す。

●細目全体の比較（ただし地名細目と特殊細目は除く）

$$\frac{112}{\sqrt{250} \sqrt{356}} = 0.375424852966235$$

- 一般的・形式的な細目における比較

$$\frac{9}{\sqrt{25} \sqrt{32}} = 0.31819805133946$$

- 主題に関する細目における比較

(BSHにない)

- 特定分野に関する細目における比較

(NDLSHにない)

- 言語に関する細目における比較

(NDLSHにない)

- 地名を先頭にする細目における比較

$$\frac{12}{\sqrt{17} \sqrt{51}} = 0.407541366486795$$

- 時代に関する細目における比較

$$\frac{18}{\sqrt{81} \sqrt{37}} = 0.328797974610715$$

これらの結果、「地名を先頭にする細目」において、比較的高い類似度を示した。また細目全体で計算した場合を除き、種類ごとの細目の類似度について標準偏差を求めると、 $s=0.039854051$ というバラツキの少ない結果となった。このことからBSHとNDLSHで用いる細目の種類ごとに見た場合、ほぼ同様の類似度であることがわかった。しかし、例えば「主題に関するもの」としてNDLSHの主題細目しかあげていないが、実際は「特定分野に関するもの」としてあげているBSHの「分野ごとの共通細目」の中に一致する細目が存在する。その他、「言語に関するもの」にも同様の例があるが、これらについての詳しい分析はNDCカテゴリによる比較を主とする本稿では見送った。

7. 考察とまとめ

本研究により、BSHとNDLSHは、NDCカテゴリを軸として比較した場合、互いの量的構造における類似度はほぼ一定で高いものであることが明らかとなった。特に、両者とも3類（社会科学）と4類（自然科学）が多い点が共通している。つまり、総体的にBSHとNDLSHは扱う分野において大きな差はないということが言えるだろう。しかし、語彙レベルでの比較では若干の相違が見られ、BSHは一般的な用語、NDLSHは学術的な用語を扱っているという特徴の違いが表れたとも言える結果となった。なお、その類似度はNDCの類目ごとにほぼ一定であり、分野の違いによる差はほとんど見られなかった。一方、BSHとNDLSHの各件名に付与されているNDC分類番号で比べた場合は、NDCの類目ごとにいずれも極めて高い類似度でほぼ一定していることが明らかとなった。なお、細目においては、地名を先頭にするものの類似度が最も高く、一部を除いて細目の種類ごとにほぼ同様の類似度であった。

以上、BSHとNDLSHという我が国の2大件名標目表について計量的側面で比較を行った。ここで得られた結果は、NDCを軸としたBSHとNDLSHの連携について示唆を与えるものであった。

謝 辞

本研究を行うにあたり、大阪市立大学の村上晴美教授に貴重なご助言を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。また、BSHとNDCの利用を許可くださいました日本図書館協会、およびNDLSHの利用を許可くださいました国立国会図書館の両機関に感謝申し上げます。

注および参考文献

- 1) 渡邊隆弘「件名標目によるOPACの主題検索」『TP&Dフォーラムシリーズ』No. 8, 1999, p. 3-25.
- 2) 日本図書館協会件名標目委員会『基本件名標目表 第4版』日本図書館協会, 1999, 2冊.
- 3) 国立国会図書館『国立国会図書館件名標目表2005年度版』国立国会図書館, 2007, 電子ファイル.
- 4) 全国学校図書館協議会件名標目表委員会『小学校件名標目表 第2版』2004, 303p.
- 5) 全国学校図書館協議会件名標目表委員会『中学・高校件名標目表 第3版』1999, 337p.
- 6) 国立情報学研究所(NII)が提供するオンライン共同分担目録方式による総合目録データベース.
- 7) 芳賀奈央子, 松井幸子「NACSIS-CATの和図書書誌ファイルにおける主題情報の現状調査」『研究成果流通システムの研究開発: 科学研究費総合研究(A)(課題番号06302076) 研究成果報告書 平成7年度報告』学術情報センター, 1996, p.101-115.
- 8) シソーラス形式を採用したのが、BSHは第4版、NDLSHは2004年度版からで、同時にNDLSHはPDF形式で提供されるようになった。2009年8月現在で、BSHは第4版、NDLSHは2008年度版が最新版となっている。NDLSHについては、国立国会図書館のホームページから非営利目的でテキストデータが入手できる。
http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/ndl_ndlsh.html, (参照:2009-8-15)
なお、現時点では具体的な方法や時期については示されていないが、次の文献にBSHとNDLSHの統合に向けた検討についての言及がなされている。
原井直子「国立国会図書館が目指す書誌サービス」『図書館雑誌』Vol.103, No. 6, 2009, p.384-386.
- 9) 村上幸二, 村上晴美「NDC カテゴリを用いた複数件名検索システムの開発」『情報学: Journal of Informatics』Vol. 4, No. 2, 2007.
<http://ojs.info.gsc.osaka-cu.ac.jp/JI/>, (参照:2009-8-15)
- 10) 北克一, 芝勝徳「我が国における主題索引ツール統合の試み」『TP&Dフォーラムシリーズ』No. 3, 1994, p. 6-31.
- 11) 坂本恭子, 和田弘名「『基本件名標目表』の計量的分析」『図書館学会年報』Vol.30, No. 2, 1984, p.71-80.
- 12) 和田弘名「NDC相関索引における語彙の量的構造」『帝塚山短期大学紀要』Vol.36, 1999, p.25-31.
- 13) 従来、NDLSHについては参照語の不足についてしばしば指摘されてきた。この点については、例えば次の文献に詳しい。
椎葉徹子「国立国会図書館件名標目表の構成についての一考察」『図書館学会年報』Vol.28, No. 3, 1982, p.97-109.
なお、NDLSH2005年度版では、「を見よ参照」が積極的に追加されている。この点については、次の文献に詳しい。

嶋田真智恵「国立国会図書館件名標目表（NDLSH）の改訂作業と今後について」『情報の科学と技術』Vol.57, No. 2, 2007, p.73-78.

〒631-8522 奈良市中登美ヶ丘3-15-1 ☎0742-93-5111 奈良学園登美ヶ丘ライブラリー murakami@naragakuen.jp

